歪んだ凹面鏡のリアリズム

エドガー・ヒルゼンラートの『ナチ＆理髪師』

武田智孝

文学はホロコーストをどう描くか

ホロコーストを扱った文学は，当然とはいえ，被害者側ユダヤ人のものが圧倒的に多い。しかもアンネ・フランク，プリーモ・レーヴィ，ジャン・アメリー，エリ・ヴィーゼルからルート・クリューガーに至るまで，日記や回想，エッセーなど，自らの体験に基づいたノンフィクションがほとんどである。

ドイツ人による作品はようやく 60 年代になって出始め，それらはさすがに加害者の側に焦点を当てている。

マルティーン・ヴァルザーの『黒いスワン』(1964)は，戦時中の忌まわしい過去を隠して戦後を生き延びる親世代を問い詰め，身代わりに自らを罰して自殺する息子を扱っている。かなり後になるが，ペーター・シュナイダーの『父よ!』(1987)は，アウシュヴィッツの「死の天使」として悪名高い医師にして優生学者ヨーゼフ・メンゲレの息子が，逃亡先のブラジルの隠れ家に父を訪ねて，対決する実話を元にした小説で，戦後になってもまだ優生学的イデオロギーに取り憑かれて，悔恨のかけらさえ示さない父への批判の書である。数年前，邦訳がベストセラー上位にランクインして話題を呼んだベルンハルト・シュリンクの『朗読者』(1995)は，文盲の女主人公がホロコーストに加担した咎で受刑し，服役中に識字力を身に付けて，読書を重ね，蒙を啓かれて，無知ゆえに犯した罪の重さを悟り，釈放の前日に自裁する話である。

シュナイダーとシュリンクはそれぞれ 1940 年と 44 年生まれの戦後世代だから当然かもしれないが，27 年生まれのヴァルザーも含めて，いずれも，第二世代を視点人物としていて，親世代の犯罪(者)に向き合っている点と，当事者の罪悪感の希薄さをテーマにしている点が共通している。『朗読者』のヒロインだけ例外だが，東欧辺境ジーベンビュルゲン(吸血鬼ドラキュラ伝説で有名なルーマニアのトランシル

バニア地方)の出身という設定にして，平均的現代人が失くしてしまったナイーブな心を残しているために，古風な自己形成と回心の物語が成立し，潔い自決によって罪が贖われるという筋が不自然にならないよう，工夫がなされている。しかしこの小説でも，他の被告たちは例外なく罪意識など皆無だ。これらの作品に共通するのは，比類ない罪を犯した者たちの厚かましい居直りぶりを糾弾する真摯な姿勢である。

エドガー・ヒルゼンラートの『ナチ＆理髪師』は，その点，異色である。作者はホロコーストを生き延びたユダヤ人だが，この小説ではドイツ人加害者を視点人物に据え，一人称で語らせている。変わっているのはそれだけではない。

主人公の名前はマックス・シュルツ。戦時中 SS 隊員としてユダヤ人虐殺に加担し，戦後は，自らが殺害した幼馴染のユダヤ人イッツィッヒ・フィンケルシュタインに成りすまして生き延びる。しかも，虐殺したユダヤ人の死体から抜き取らせて，隠しておいた大量の金歯(Goldzähne)を元手に，闇市で大儲けをし，更には，ナチの残党探しで身に危険が迫るのを感じると，仇敵のお膝元なら犯人探しは行われないと，ユダヤ人支援団体が支払ってくれた渡航費用でパレスチナに渡り，幼馴染イッツィッヒの父親が仕込んでくれた技能を活かして，理髪店を開業し，安泰な暮らしを手に入れる。

主人公は罪の意識に苦しむどころか，何よりも逃げ延びることのみを考え，身の安全しか念頭にない。その点では，上に見た他の作品に出てくる大方の人物たちと何ら変わるところがない。違うのは，作者がそういう 鉄面皮 な男を主人公に据え，他ならぬその人物の視点から一人称で語るという大胆な手法をとったことと，そうすることで倫理的･道義的な眼差しと正義の観点を棚上げにした点である。つまり，少なくとも表立っては批判を加えることもなく，主人公を自由に泳がせ続け，逃亡に成功させるのみならず，最後には安定した生活までも得させている。

書かれたのは 1967-8 年。原語はドイツ語だったが，作者が当時まだニューヨークに住んでいたこともあって，先に英訳がアメリカで出版され，次いでイタリア語，フランス語に翻訳されて，いずれの国でも成功を収めた。にもかかわらず，肝心のドイツではなかなか引き受け手が見つからず，60 以上の出版社に売り込んだが，ことごとく断られ，77 年になってようやくケルンの小さな版元から刊行された。

ディートリヒ・ドープハイデによると，当時，ホロコースト文学には「笑うべからず(Lachverbot)」という不文律があったという。[1)]

作者自身は「このテーマはチョー真面目に(mit tödlichem Ernst)扱わねばならない，それ以外はだめ，とみんな思い込んでいるのだ」[2)]と言っている。

ホロコーストはその規模においても質においても比類を絶する犯罪であり，ドイツではこれにだけは時効がない。文学でも，ホロコーストを扱う場合は，被害者が自分の悲惨な体験を自伝風に語るか，加害者を問題にするなら，罪と贖いを中心に据えた倫理的・人道的な正義の視点が当然の前提とされていた。それを無視することはタブーで，これを破ったことがドイツ出版業界の反発を買ったのである。

しかし，ホロコーストは文明の最先端で待ち受ける人間的尊厳への徹底的冒涜だった。合理主義的な野蛮，あまりにも組織的，効率的なユダヤ人虐殺の不気味さ，といった文化やヒューマニズムの破綻と崩落を前にしては，人道，正義…といった，人倫の伝統的な規範など，消し飛んでしまうのではあるまいか。

たとえば次のようなエピソードはどうか。

フランクフルトのアウシュヴィッツ裁判の記録を踏まえて書かれたペーター・ヴァイスの『追究』には，八歳の男の子が妹の遊び相手にと，収容所職員の飼っているウサギ一匹を盗んだため，二人の子供と母親を銃殺せよとの命令が下り，ためらいもなく実行する分隊長シュタルクという男が被告人として登場する。当時二十歳だった彼は大学入学資格試験の準備中で，子供と母親が連行されてきた時には，ちょうど「ゲーテにおける人間性について」[3]議論している最中だった。

また，セム・ドレースデンによると，アウシュヴィッツに勤務した医師Dr.クレーマーは欠かさず日記をつけていて，収容所の食事が美味なることを繰り返し褒め称え，秋日和に楽しむ日光浴と，研究資料として「新鮮な人間の肝臓と脾臓」[4]が規則正しく届けられることとが，特に気に入っている，と書いているという。

もはやアモラルですらない，関節の外れた世界。誰しも，憤りより，船酔いにも似た眩暈をもよおすのではあるまいか。

なじみ深い世界が突如，異様なものに変貌し，われわれのこれまでの行動・思考・判断の基準や尺度がまったく通用しなくなり，こんな世界では生きてゆけないという生の不安に駆られる，そういう「奇異で不気味な」世界を，ヴォルフガング・カイザーはグロテスクと呼んだが，[5]ここには確かにそういうところがある。

バフチーンがカイザー理論をモダニズムに偏していて，ロマン主義以前には適用できないと批判して，「カーニバル的世界感覚」[6]を中心に据えたグロテスク論を展開したことはよく知られている。しかし，バフチーン理論はホロコーストの世界には当てはまらない。中世民衆の猥雑な哄笑が響きわたり，かりそめの生真面目な社会秩序を相対化する「宇宙的豊穣」のグロテスクからは限りなく遠い世界がそこにはある。

バフチーンの言う豊穣・猥雑な「カーニバル的世界感覚」を徹底的に排除し尽く

した果てに，世界の有機的統一が失われ，疲弊し，硬直して干からび，ついには破綻して，ボロボロ壊れつつある…，世の末のグロテスクとでも呼ぶほかない。ここにはあるのは，そういう類の奇怪さ，不気味さではないだろうか。

従来のどんなグロテスク理論もここでは失効する。ドープハイデはそれら諸理論に関して，学問的で詳細な比較検討を行っているが，そうすること自体，既にグロテスクな印象を与えかねない。[7)]

元ナチ犯罪者の罪悪感の希薄さを暴き，告発する倫理的な正義の視点からの批判の矢も，こういう世界にまでは届かない。

そこでヒルゼンラートが用いたのは，歪んだ凹面鏡のように，デフォルメと誇張によって世界と人間の姿をますます奇怪で異様なものとして描き出し，そうすることで世界をかえってリアルに映し出して，読者に突きつける，という手法である。

拙論では，ユダヤ人の死体から抜き取った「金歯」と，大量虐殺犯の元 SS 隊員が生き延びるためユダヤ人に〈成りすます〉という，非道と鉄面皮を代表する二つの主題に焦点を合わせて,『ナチ＆理髪師』における，凹面鏡的手法によるグロテスク・リアリズムの様相を探っていきたい。

「金歯(Goldzähne)」の主題

紹介した粗筋の中でも特に衝撃的なのは，虐殺したユダヤ人の死体から抜き取らせて隠しておいた大量の金歯を元手に,闇市で大儲けをした,というくだりだろう。

強制収容所では，ユダヤ人の囚人からなる特別任務班を組織し,「廃物利用」と称して，虐殺死体から貴重品を探し出させ，金歯を抜き取らせて，ダンボールに詰め，ベルリンの親衛隊本部に送っていた。ソ連軍が迫ってくる中で，慌てて収容所を引き払う際に,まだ発送されずに残っていたそれらをトラックに積んで逃げたが,途中でソ連軍やパルチザンの猛攻に遭い，親衛隊員のほとんどが殺された。生き残ったのはマックス一人，その金歯の一部を背嚢の底に隠して逃げた。

実は，死体から金歯を抜き取る話は，ヒルゼンラートの第一作『夜』という小説にも，全然違った状況でだが，たびたび出て来る。

彼は 1926 年ライプチヒで生まれ，近くの町ハレで育った同化ユダヤ人だが，38 年ナチの迫害を逃れて，かつてのオーストリア領ブコヴィーナ，当時そこはルーマニア領になっていたが，そこの小さな町の祖父母の許に疎開した。戦争が始まるとルーマニアはナチス・ドイツと同盟関係に入り，国内のユダヤ人を集めて，東部占領地区のウクライナに移送した。ヒルゼンラート一家も例外ではなかった。戦火で破壊された町の一角をユダヤ人居住区(ゲットー)として，他の市街区から厳しく区

切り，そこに彼らを押し込めたのである。ユダヤ人の「自然消滅」を待つ作戦だった。

絶滅収容所とは異なり，ガス室や強制労働はなかったものの，被収容者の密度が異常に高く，食料のほかに寝場所が絶対的に不足していて，彼らの日常はそれらを確保するための闘争から成り立っていた。衛生状態が劣悪で，夏は疫病が流行り，冬は寒さが厳しいので，餓死者以外にも，ひどい時には毎日何十人単位で死者が出る。道端や道路わきの側溝に死体が転がっているのは日常的な光景で，朝になると牛に引かせた荷車が来て,これらの死体を積み上げては,共同墓穴へと運んで行く。

このゲットーでの体験や見聞を，ウルトラ自然主義とでも言うべき手法で細密に描き出したのが,『夜』という小説である。

ゲットーでは死人が出ると，あっという間にめぼしい衣服や靴が剥ぎ取られ，金歯が見つかれば抜き取られる。せっかく手に入れた財産や食料も油断していると必ず盗まれてしまう。窃盗は日常茶飯事。身に付けていても寝ている間に奪われる。

収容所で受けた残虐非道な扱いを，体験を元に訴える。それがこの種の文学の常道であるが，小説『夜』には直接の加害者であるドイツ軍人もルーマニア兵もほとんど登場しない。描かれるのはもっぱら，被害者であるユダヤ人が運命を共にする同胞に対して加害者と化し，より力の強い者が非力な仲間を踏みにじり，裏切り，見捨てる有様だった。

ここでもヒルゼンラートはタブーを破ったのである。おかげで処女作『夜』のドイツでの本格的な出版は，第二作『ナチ＆理髪師』が成功を収めた後になった。

小説『夜』でいちばん衝撃的な場面は，主人公のラネックが，発疹チフスで亡くなった兄の口をこじ開け，ハンマーを使って手を血まみれにしながら，金歯を抜き取るシーンである。しかも兄嫁の見ている前でこれをやる。ゲットーの中には闇のルートを押さえている有力者がいて，そういう者に頼んで金歯を食料と交換してもらうのだ。他の者たちもその金歯を狙っている。むざむざ赤の他人に横取りさせるわけには行かない。正当な相続人は兄嫁だが，彼女にそんなことは出来ないので，代わりに弟の自分がやるというわけだ。

彼はむろん自分のためだけにするのではない。食べ物は兄嫁にも分けてやる。しかし彼女は何週間も彼と口を利かない。ある日栄養失調で兄嫁が倒れたという報せを受けて，とんで行って助けてやる。そのとき初めて彼女は心を開き，長いこと口を閉ざし続けたのは，夫の歪んだ血まみれの顔が目に付いて離れなかったためだ，貴方を恨んでいたからではないと言い，次のように続ける。

私は貴方を非難しなかったわ，貴方が悪いんじゃないって分かっていたからよ。貴方がああしたのは追い詰められているからよ，あの歯で私たちが生きられる，少なくともしばらくはって思ったからよ。貴方は私たち二人のためにそうしたのよ。フレッド(夫・兄[注・引用者])だって弟を赦してくれるって思った。（中略）他にどうしようもないんだから。死んだ人たちは飢えに苦しむ者たちを赦してくれるわ。追い詰められて他にどうしようもない者たちを，死んだ人たちは赦してくれるわ。[8)]

飢えに苛まれ，生きるためにやむなくやった義弟の行為が赦されると言う兄嫁でも，虐殺したユダヤ人の死体から抜き取らせた大量の金歯を平然と売り払って，戦後再出発の元手にする『ナチ＆理髪師』の元親衛隊員となると，けっして赦すことは出来ないであろう。

しかも，マックスは金歯を売りさばいて，闇商売を始める資金にするだけではない。その幾つかを溶かし，金冠にして，治療した自分の歯に被せるのである。彼は歯医者に言う:「わしゃ歯が悪い。人間様なら虫歯をほったらかしたまま世間をほっつき歩いたりはしないもんだよ。わしの口を金歯で埋め尽くしてもらいたいね。見せびらかしたいのさ。笑ったら眩ゆいようにな。」(S.201)[9)] おまけに彼は大きいのと小さいのと中くらいの金歯を三つハンカチに包み，「記念(Andenken)」(S.201)として取っておくのだ。

残りの歯はみんな売りさばいた。しこたま儲けさしてもらった。闇商売をおっぱじめるには十分なゼニだ。理髪店はまだ先の話だ。おれは思った，「まあ，そのうち…自分の理容サロンを持つさ。きっとだ。またどっしりと根を降ろさなきゃ。まっとうで，ちゃんとした生活を送るためにな(ein anständiges, ordentliches Leben zu führen)。家庭だって持たなきゃならん。当り前じゃないか。」[傍点引用者] (S.201)

世の末のグロテスク。ヒルゼンラートは，ホロコーストのそういう局面をマックスという人物において，凹面鏡的手法で見事に捉えてみせた，と言えるだろう。

この小説の刊行から三ヵ月ほど経った 1977 年 12 月，批判の声がまだ一部に喧しかった頃，ハインリヒ・ベルがヒルゼンラート擁護の一文をツァイト紙に寄せた。

その論旨をパラフレーズすると，ナチスとその時代の研究が進んでゆく中で，忘れ去られているのはヒトラー体制を支えた民衆，ホモ・サピエンスのドイツ的変種のことだ。ユダヤ人大量虐殺に加担し，あるいはそれを背後で黙認した彼らこそ，

無条件にナチスと呼んで然るべき連中である。あんなに多くの恐ろしいことが起きたのに，何も知らなかった，誰もあんなことは望まなかったと皆が言う。そういう時，誰も知らず，誰も望まなかったことをいったい誰がやったのか，と問う者がいても不思議はない。殺害命令に唯々諾々と従うほど「小心律儀(gewissenhaft)」で，リュック一杯の金歯を戦利品として祖国に持ち帰るに十分なだけ「厚顔無恥(gewissenlos)」[10]なのはいったいどういう人間か，それを中心に据えたのがヒルゼンラートの『ナチ＆理髪師』である。

マックスの金歯のように忌まわしい富の上に，戦後どれほど多くの財産や成功が築かれたか。近年のナチス研究やその時代の客観的叙述は，この「金歯」のような具体的なことを数多く見逃している。まさしくそのような時期に，ヒルゼンラートの小説が刊行されたのは時宜にかなっている。

ベルはマックスを「血塗られた幸せハンス(Hans im Glück im Blut)」と呼んでいる。グリム童話の「幸せハンス」は，七年間の奉公を終え，主人から給金として大きな金の塊をもらうが，帰郷の途次，出会う人ごとに相手の持ち物を羨ましく思って取り替え，最後はついに無一文になって，心も軽く身も軽く，幸せだけを胸に家に辿り着く話である。

この童話は，むやみに他人を羨ましがるものではない，という教訓なのか，清貧・無一物のすがすがしさを讃えたのか，解釈が分かれるが，ベルは後者を採っているようである。ハンスとマックスに共通しているのは金塊/金歯を持って故郷を目指すところだけ。七年間の労働の正当な報酬をも放下して清貧に至りつく「幸せハンス」と，非道に強奪した血塗られた金塊/金歯を元手に，裕福で安泰な暮らしに到達するマックスとは，ちょうど真逆の関係にある。

『ナチ＆理髪師』では『ヘンゼルとグレーテル』や『ホレおばさん』といったグリム童話が転倒した形で使われているが，ベルはそれを念頭において『幸せハンス』を意図的に捻じ曲げて引き合いに出したのである。

ベルがそこで徹底してこだわっているのが「金歯(Goldzähne)」だ。新書版にして 3 ページ程の短い評論の中で 6 回もこの語が出てくる。同じものを指す Goldlast まで入れると 7 回である。ユダヤ人の虐殺死体から抜き取った金歯に，戦時中の犯罪と戦後の虚妄の繁栄を象徴させ，集約して見ている感がある。

ベルがそれほどまでに金歯を問題にするのには，わけがあった。彼には，30 年近く前の 1949 年に書いた『闇の中で』という短編がある。

夜間歩哨に立っていた兵隊がロシア兵の死体から金歯を抜き取っているところを発見され，同僚の兵士に射殺される事件を扱っている。歩哨のやった行為に対す

る上官の驚愕と戦慄はOhという短い叫びとも呻きとも取れる音声に集約され，そのOhは，一度は「全世界の重みが彼にのしかかって来たよう」と形容され，もう一度は「人間のありとあらゆる驚愕が込められているようだった」[11]と表現されている。

ベルの身上とも言うべき堅固な庶民的倫理感覚がよく出た作品だが，しかし，同じ時期，同じ東部戦線の数々の強制収容所では，同じ悪行がはるかに大規模に，組織的に行われていた。ベルのヒューマニズムにとっては，想像を絶するような深い闇が口を開いていたのである。

ヒルゼンラートでも，まだ『夜』の世界には，兄嫁デボーラのような「聖女」が出てくる。重篤の夫を献身的に看護し，母親をなくした赤子を引き取って養う。また，八歳の少女が酔っ払った兵士たちにレイプされかけたところを，売春宿の女たちが裸足で駆け出して来て救い出す。小さな蝋燭の灯のような人間性の発露が見られる。

ベルの短編では，敵兵の死体から金歯を抜き取る兵士を包み込む闇が，処刑拳銃の放つ一瞬の閃光によって切り裂かれる。厚顔無恥な扇情的ジャーナリストをカタリーナが射殺する，あのピストルから飛び散った火花と同じである。

しかし，マックス・シュルツの口を埋め尽くす金歯が発するグロテスクな輝きを恥じ入らせ，かき消すような〈正義〉の光は『ナチ＆理髪師』のどこにも見出せない。

〈成りすまし・取り違え〉の主題

昔から偏見(Vorurteil)と誹謗中傷(Verleumdung)によってあまりにも醜く歪められたユダヤ人イメージが出来上がっているために，ユダヤ人に関わる〈取り違え・入れ替わり〉は，しばしば深刻なドラマを生み，文学の問題的な主題になってきた。

レッシングの『ユダヤ人』では，貴族が盗賊に襲われて危うかったところを行きずりの旅人に助けられるが，実はこの旅人はユダヤ人である。風采が立派で，温厚な人柄のうえに，訛りのない完璧なドイツ語を話すので，当時のユダヤ人イメージからあまりにも懸け離れている。まさか彼がユダヤ人とは，誰一人夢にも思わない。

貴族はこの命の恩人に，自分を襲った賊はきっとユダヤ人だったに違いない，と言う。実際，盗賊たちは付け髭などして，ユダヤ人らしく変装していたので，貴族がそう言うのにも根拠はある。しかし彼は更にこう続ける。ユダヤ人ほど悪辣無道で，卑劣きわまる連中はいない。彼らの顔つき，目つきを見れば，その腹黒さ，不誠実，利己主義，嘘偽り，裏切りがはっきりと読み取れる。それにひきかえ，貴方はまたなんと誠意に満ちていて，寛大で，気持ちのよいお顔をなさっておられるこ

とか。貴方のようなご容貌の方にはこれまで一度もお目にかかったことがない。ついては，ぜひ自分の娘を娶って，全財産を相続してはくださるまいか。

最終場面になって，旅人が身分を明かすと，「ユダヤ人ですって，なんと残酷なめぐり合わせ(grausamer Zufall)!」。[12] 更に「ユダヤ人らしくないユダヤ人もいるんですねぇ」という台詞が出て来るが，いくら「らしく」なくても，ユダヤ人はやっぱりユダヤ人だ，という意味にも取れる。

ユダヤ人が，どんなにととのった身なり，行いすました外見，立派な評判をかち得ても，彼にはその上に，どうしても追い払うことの出来ないもう一つの「ユダヤ人であるという評判が重なって」[13]くる，とサルトルは書いている。レッシングがいくら啓蒙的情熱をもって，尊敬に値するユダヤ人像を描いて，偏見を正そうとしても,再度サルトルを引用するなら,「反ユダヤ主義的情熱は固執観念症」であって，その性質上，真実を恐れる。ユダヤ人憎悪は信仰みたいなものだから，言葉や理性にはてんで耳を貸さないのだ。

レッシング劇から二百十年余を経た 1961 年，マックス・フリッシュの戯曲『アーンドラ』が初演された。非ユダヤ人青年がユダヤ人と見なされたために，偏見と差別に苦しみ，迫害を受け，ついには殺害される話である。

この青年アンドリは私生児で，父親は小国アーンドラの男，母は敵対する隣国黒い國の女である。この子をアーンドラに連れて来るにあたって，父親は，敵国民との混血と言うと，不利な扱いを受けかねないので，反ユダヤ主義的な黒い国で迫害されていたユダヤ人の孤児を引き取ったと，嘘を言い広める。当時のアーンドラでは，ユダヤ人と見なされる方が安全だった。

ところが，隣りの強国黒い國の脅威が高まり，白い国アーンドラの安全が脅かされ始めると，軍国主義的なナショナリズムが高揚し，隣国の圧力に押されて，アーンドラでもユダヤ人は邪魔者として迫害され始める。

ユダヤ人でないのにユダヤ人と見なされただけで，ユダヤ人に対する偏見がすべて当てはめられる。金銭に汚い，手先が不器用，商売には向くが職人には向かない，腰抜けである，感情に乏しい，心がない。アンドリ自身まで，そう言われ，扱われ続けることによって，ユダヤ的とされるそうした特性をすべて自分が具えていると思い込むようになる。

ユダヤ人像はユダヤ人とすら無関係なのだ。ユダヤ人であろうとなかろうと，誰でも，ちょっとしたきっかけさえあれば，簡単にユダヤ人に成りうる，あるいは，されてしまう。フランス人と見なされたとしても，何の危険もないが，ユダヤ人と見なされた途端に，何百年にもわたって人々の脳裏に擦り込まれた極度にネガティ

ブなユダヤ人イメージを重ね合わされ，死にまでも至る迫害にさらされる。

ベルには『死因：鉤鼻』という短編がある。先ほど紹介した『闇の中で』と同じく，戦後間もなく書かれたもので，ドイツ人作家がホロコーストを扱った文学としては最も早い時期に属する。

ロシア南部の町のユダヤ人狩りで，間違ってロシア人が連行される。取り違えのもとは,題名の示すとおり「鉤鼻」,通常ユダヤ人のものとされる身体的特徴である。虐殺を実行するドイツ軍は親衛隊ではなく，正規の国防軍で，ヘーゲミュラー少尉はそもそもユダヤ人虐殺に反対だが，組織の中の個人の無力さを思い知らされ，既に心身は消耗しきっている。虐殺の指揮に当たる同僚の士官に，取り違えを取り消す措置を急ぐよう促す。「じゃあシロなんだね(Unschuldig also?)」と言う相手に，「彼もシロなんだ(Auch unschuldig)」[14][下線・引用者]と切り返して，ユダヤ人もみな無罪潔白，掃討されるいわれなどないことを訴えようとするが，相手は一瞬ピクリとしただけで，ささやかな抗議の一語は沼のような心に呑み込まれて，何の波紋も残さずに消えてしまう。

この後，ロシア人を探すため，射撃音の鳴り響く虐殺の現場に向かう。連行されたユダヤ人たちは町外れの巨大な穴の周りに並ばされ，自動拳銃で撃ち殺され，穴の中に折り重なるように倒れこみ，周りの地中に仕掛けられた発破で土が吹き飛ばされ，穴を塞ぐ。死者もろとも負傷者までも埋められてゆく。

銃撃を受けて血まみれで倒れていたロシア人を見つけ，軍用車で野戦病院に運ぶが，ヘーゲミュラー少尉は途中で気を失い，我に帰った時，彼の目の前で行われるのは，ロシア人の死亡診断書作成の作業だけ。軍医が看護婦に口述する：

「死因ね----ま，鉤鼻か(Todesursache---na, Hakennase)」

これを聞いた少尉は発狂する。奇妙な笑い声を上げ，白目を剥いて叫び続ける：

「死因：鉤鼻(Todesursache: Hakennase)」[15]

「鉤鼻」という些細な身体的特徴だけで，ロシア人がユダヤ人と間違われて殺害される理不尽さは，ユダヤ人というだけで虐殺される不条理に比べて，より大きいというわけではけっしてない。発狂した少尉の口走る「死因：鉤鼻」は，ユダヤ人と間違えられたロシア人だけでなく,ユダヤ人殺害そのものにこそ向けられている。

虐殺に当たるドイツ兵たちは士官も含めて皆，酒気を帯びている。しかし正気を失ってはいない。狂気の沙汰を正気で実行している。だが，狂っているのは正気の彼らの方で，正気なのは発狂する少尉だけだ。すべてが転倒している。

ユダヤ人と見なされることが破局につながる伝統の中で,『ナチ＆理髪師』において，たぶん初めて，非ユダヤ人がこともあろうにユダヤ人への成りすましを企て

る。元ナチの殺人犯にとって，戦後，ユダヤ人と見なされるほど安全なことはないからだ。マックスにそれが可能なのは，容貌外見がユダヤ人カリカチュアの生き写しだからである。髪はまっ黒，出目，鉤鼻，唇は厚く，虫歯だらけで偏平足と，『突撃(Der Stürmer)』などがさかんに宣伝しまくったユダヤ人像そのものなのだ。戦前これに苦しめられたが，戦後になると，同じ外見が役に立つ。マックスが，自分はユダヤ人だと言っても，誰一人疑う者はいない。みんな洗脳されてしまっているのである。

むろん元ナチの医者に頼んで割礼手術を施してもらい，左腋の下に彫られた SS の隊員番号を消して「非ナチ化」を終え，アウシュヴィッツの囚人ナンバーを入れ墨して，身体検査も受けるけれども，彼の場合は文字通り顔パスなのだ。

神との契約である割礼を，逃亡の手段として，外科手術に貶めるというだけでも十分ショッキングだが，真に慄然となるのは，単にユダヤ人に成り変わるというだけでなく，自らが殺害したユダヤ人，恩人の息子で幼馴染のイッツィッヒ・フィンケルシュタインに成りすますという点である。

二人は同じ町内のほぼ真向かいの家にいて，誕生日が同じ，まるで双子みたいに育つ。入れ替わるためには外面的特徴がユダヤ人そっくりというだけではむろん十分ではない。ユダヤの生活習慣や宗教的仕来りにもある程度通じていなくてはならない。マックスは幼い頃からシャム双生児みたいにイッツィッヒにくっついて生きてきたから，この幼馴染の家庭でサバトを初めユダヤ教の祭日の集いに同席させてもらい，シナゴーグにもついて行って，同化ユダヤ人が唱える程度のお祈りくらいは習い覚えていたし，イディッシュ語やヘブライ語の片言半句くらいは聞きかじりで知っていたのである。

彼は根っからの反ユダヤ主義者どころか，ユダヤ人嫌いですらなかった。彼が立派な理容師としての技能を身につけることが出来たのも，この偏見のなさのお蔭である。彼の養父も床屋だが，同じ床屋でも，はやらない三流の散髪屋でしかないのを見限って，親の意に背いて，向かいの一流理容師であるイッツィッヒの父親の許に弟子入りした。養父の方はそれを根に持ってますます反ユダヤ主義に凝り固まって行くが，マックスはその時点では，理髪師の良し悪しを決めるのは腕前で，ドイツ人かユダヤ人か，人種なんか関係ないという，至って健全な常識に従って生きていたのである。

彼が戦後，他ならぬイッツィッヒ・フィンケルシュタインを名乗るのは，ユダヤ人の中で，家庭環境や家族の歴史，親族関係に至るまでいちばんよく事情を知っていたのがフィンケルシュタイン一家だったからに他ならない。

そんなマックスがなぜナチスに入党し，SS 隊員になり，ユダヤ人迫害に加わったのか。また，こともあろうになぜ恩義あるフィンケルシュタイン夫妻や親友イッツィッヒまでも殺害するに至ったのか。

母親が売春婦，父親は五人の常連客のうちの誰か，「アーリア人種」でありながら，顔つきはナチスの宣伝した醜悪なユダヤ人像そっくり，といったアイデンティティーの曖昧さが，無節操で日和見主義的な生き方につながった，ということは言える。母親の行状，さらに養父がサディスティックな小児性愛者という「家庭」環境によって，倫理を基盤とする社会的自己が破綻しおり，権威や権力に縋るしか生きる術を知らなかった，といった解釈も成り立つ。ヒトラー政権を支えた社会的背景の一つがここに捉えられていることは確かである。興味ある問題だが，拙論のテーマから離れるので，これ以上の深入りはしない。

かくして，元ナチの大量虐殺犯マックスは，自らが殺した友人のユダヤ人に成りすましてパレスチナに渡り，ユダヤ人地下組織に引き込まれるまま，独立国家建設を目指すテロリストになり，後には正規軍の軍曹(親衛隊時代と同じ階位)となって，新国家防衛の戦いに参加し，強制収容所を生き延びたユダヤ人女性と結婚して家庭を築き，自らが殺害した恩人フィンケルシュタイン父の仕込んでくれた技能を活かして理髪店を開き，フィンケルシュタイン理容サロンと同じ「社交紳士(Der Herr von Welt)」を屋号として掲げ，市の動物愛護協会会長の椅子におさまる。

ベルの短編で，ユダヤ人に間違えられて殺されたロシア人の死亡診断書に「死因，鉤鼻」と書かせて平然としている軍医にも，マックスと同様の恐るべき無感覚がある。しかしそこには，発狂するヘーゲミュラー少尉という，いわば救いがあった。『ナチ＆理髪師』にヘーゲミュラーは出てこない。発狂には道義心や魂が必要だが，そういう正義と人倫のファクターを作者は意識的に作品から排除している。

庶民的倫理感覚を捨てきれないベルと，ベル的道義心がけっきょく発狂や射殺といった，自他いずれかを抹殺する破壊的結末に行き着くほかない，そういう世界は，むしろ凹面鏡的手法で，デフォルメし，誇張して映し出し，読者に突きつけるしかない，そう肚に決めたヒルゼンラートと。

「お前は捕まり，絞首刑にされるぞ」と囁く内面の声を，マックスはせせら笑う。

それはありそうもない。大方の大量殺人犯は自由に泳ぎまわっている。外国に逃げた奴もいるが，ほとんどはまた祖国に舞い戻った。奴らはうまく行っている。（中略）商売人や工場主や実業家になり，政治家として閣僚に名を連ねているのもいる。高い地位に昇り，名声を得ている。（中略）彼らは自由に跳びまわっていて，神と人

の世を嘲笑っている。そう，付け加えれば〈正義〉という言葉をも。(S.459f.)

ふてぶてしい居直りだが，客観的には確かにその通りなのだ。

この小説が書かれたのは 1967-8 年。60 年代といえば，1960 年にアドルフ・アイヒマンが潜伏先のアルゼンチンで拉致され,翌年イェルサレムで裁判に掛けられて，62 年に処刑された。63 年 12 月から 65 年 8 月にかけて 20 ヶ月にわたり，フランクフルトでアウシュヴィッツ裁判が行われ，20 人の被告に判決が下された。

しかし冷戦構造の中で，共産圏の脅威から西側を守るために必要とされる程の大物や，資本主義体制下で欠かせない人材はあらかじめ除外されていて，被告人たちは氷山の一角であるのみならず，みな小者である。一番の大物はアイヒマンだろうが，彼でさえ上からの命令を忠実に実行する能吏，歯車的存在でしかなかった。

ペーター・ヴァイスの『追究』で，証言者の一人はこう言っている。

この裁判(フランクフルトのアウシュヴィッツ裁判[注･引用者])の被告人たちは下っ端だった者たちにすぎません。被告たちの上にいて，この法廷に呼び出され尋問されることのなかった大物がいるのです。(中略) この連中は何のお咎めも受けずに暮らしています。高い官職につき，富を蓄え，当時の囚人たちが使い捨てにされた企業で，今なお活動を続けています。[16)]

マックスの言い分と重なる。正義の裁きを受けることもなく，高位高官に昇りつめ，戦時中「囚人たちを使い捨て」にした大企業で懐を肥やし，活動を続ける元ナチの大物が大勢いる。そうであるいじょう，大量虐殺犯とはいえ「雑魚にすぎない(nur ein kleiner Fisch)」(S.73)元 SS 隊員が，人目を欺いて逃亡に成功し，安泰な暮らしを手に入れたとしても，何の不思議があるだろう。

関節の外れた状態は，戦後もナチの時代と変わらないのである。

注

1) Dopheide, Dietrich: Das Groteske und der Schwarze Humor in den Romanen Edgar Hilsenraths. Berlin 2000. S.14.
2) Hilsenrath, Edgar: Berlin...Endstation. Berlin 2006. S.14.
3) Weiss, Peter: Die Ermittlung Oratorium in 11 Gesängen. Frankfurt am Main 1991. S.106.
4) Dresden, Sem: Holocaust und Literatur. Frankfurt am Main 1997. S. 30.

5) Kayser, Wolfgang: Das Groteske. Seine Gestaltung in Malerei und Dichtung. Tübingen 2004.　S.198f.

6) ミハイール・バフチーン(川端香男里訳)『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』　せりか書房　1997 年　PP.48-50.

7) Dopheide, Dietrich: ebd. S.55ff.

8) Hilsenrath, Edgar: Nacht.　München 1990.　S.373.

9) Hilsenrath, Edgar: Der Nazi & der Friseur. 8. Auflage. München 2007. この作品からの引用はすべてこの版からで，カッコ内にページ数のみを記す。

10) Böll, Heinrich: Hans im Glück im Blut. In: Edgar Hilsenrath. Das Unerzählbare erzählen. Hrsg. Thomas Kraft. München. 1996. S.76-79, S.76.

11) Böll, Heinrich: In der Finsternis. In: Wanderer, kommst du nach Spa... Erzählungen. München.　2005.　S.135-144,　S.143

12) Lessing, Gotthold Ephraim: Die Juden: In: Werke in drei Bänden. I . S.247-288, S.287.

13) ジャン・ポール・サルトル(安堂信也訳)『ユダヤ人』 岩波新書 1993. P.88.

14) Böll, Heinrich: Todesursache: Hakennase. In: Die Verwundung und andere frühe Erzählungen.　München. 1993.　S.37-44,　S.40.

15) Böll, Heinrich: ebd. S.44.

16) Weiss, Peter: ebd. S.195.

Der deformierende Hohlspiegel-Realisumus Hilsenraths

Über den Holocaust-Roman „Der Nazi & der Friseur“

Tomotaka TAKEDA

In der Holocaust-Literatur, die fast aus den nonfiktiven Memoiren der KZ-überlebenden Juden und den gewissenhaften Werken der deutschen Schriftsteller der Söhnegeneration besteht, die dem Verbrechen der Väter gegenüberstehen, nimmt Edgar Hilsenraths „Der Nazi & der Friseur“ eine Ausnahmeposition ein. Obwohl der Autor ein gerettetes jüdisches Opfer ist, ist dessen Hauptfigur, Ich-Erzähler und Perspektive-Person Max Schulz ein arischer Täter, SS-Mann, Massenmörder, der nach dem Krieg zum Überleben seine Identität mit einem Juden wechselt und die Goldzähne, die den im Lager Ermordeten geraubt worden sind, verkauft, um ein neues Leben anzufangen.

Hier behandle ich hauptsächlich das Goldzähne- und Identitätwechsel-Motiv von dem Roman, indem dabei zwei Novellen Bölls, „In der Finsternis“ und „Todesursache: Hakennase“, zum Vergleich herangezogen werden. In der ersteren wird ein Soldat, der Nachtposten gestanden hat und in der Finsternis den gefallenen Russen die Goldzähne zog, von den Kameraden auf der Tat ertappt und hingerichtet. In der letzteren wird ein Nichtjude, der wegen der „Hakennase“, des angeblich jüdischen Merkmals, als Jude gilt, ermordet, was vom Militärarzt einfach mit „Todesursache, na Hakennase“ erledigt wird. Dessen Augen- und Ohrenzeuge, ein deutscher Leutnant, wird davon schockiert und verfällt dem Wahnsinn. Die beiden Erzählungen beweisen die bürgerliche Moral und den Humanismus Bölls.

Hilsenraths Hauptfigur Max Schulz aber hat die Goldzähne von den ermordeten Juden nicht nur verkauft, um die Grundlage für ein „anständiges, ordentliches Leben“ zu schaffen, sondern sogar einige „für Eigengebrauch“ einschmelzen und „einen Mund voller Goldzähne“ machen lassen, daß das Gold glänzen solle, wenn er lache.

Das unheimlich groteske Strahlen aus Maxens Mund wird von keinem Akkublitz der Gerechtigkeit übertroffen, während bei Böll das Feuer der Hinrichtungspistole die Finsternis, wenn auch nur augenblicklich, durchleuchtet.

In der Tradition, in der das Verwechseln des Juden, besonders das mit dem Juden, zur Katastrophe führt, wie in Lessings „Die Juden“, Frisches „Andorra“ und Bölls „Todesursache: Hakennase“, ereignet es sich wohl zum ersten Mal in „Der Nazi & der Friseur“, daß sich ein Nichtjude als Jude ausgibt. Dabei handelt es sich um einen ehemaligen SS-Mann, einen Massenmörder, der sich vor der Verfolgung in der Nachkriegszeit am besten gesichert sieht, indem man ihn für einen Juden hält. Dank dem häßlichen Judenbild, das in der Nazizeit verbreitet worden ist, gelingt ihm das, denn Max Schulz, der rein Arische, sieht genau wie dieses Judenzerrbild aus, was ihn vor und in der Kriegszeit gequält hat und jetzt ihm sehr willkommen ist. Bis dahin wäre der Roman nur eine Satire.

Max verwandelt sich aber nicht in einen beliebigen Juden, sondern in einen besonderen, der sein bester Freund aus der Jugend und der Sohn seines Wohltäters war, den er im KZ mit den ihm gütigen Eltern zusammen ermordet hat.

Dann fährt er nach Palästina, weil „in der Höhle des Löwen“ ihn niemand suchen wird. Er heiratet eine KZ-überlebende Jüdin und eröffnet den Friseursalon, der wie einst der seines jüdischen wohltätigen Meisters, den er ermordet hat, „Der Herr von Welt“ heißt.

Bei Hilsenrath könnte man von dem deformierenden Hohlspiegel-Realismus sprechen, dessen verfremdete, übertriebene Bilder realer, effektiver wirken.

Diese unglaublich freche, groteske Geschichte „Der Nazi & der Friseur“, in der Moral, Humanität, Gerechtigkeit(wie von Böll) alle ungültig geworden sind, spiegelt nicht nur die Kriegszeit, sondern auch die Nachkriegswelt treu, in der große Männer der Nazizeit „unbescholten hohe Ämter bekleiden“, „ihren Besitz vermehren“ und „in den Werken fortwirken, in denen die Häftlinge von damals verbraucht wurden“(cf. Peter Weiss: „Die Ermittlung“).